

ルカによる福音書5章「弟子を集めるイエス」

1A 人をとる漁師 1-11

2A 宗教を超える権威 12-26

1B きよめにおいて 12-16

2B 罪の赦しにおいて 17-26

3A 取税人の招き 27-39

1B 罪人との食事 27-32

2B 新しい皮袋 33-39

本文

ルカによる福音書5章を開いてください。私たちはイエス様のガリラヤにおける働きを、4章から読み始めています。その働きは、イザヤ書に預言されているメシヤのそれでした。イエス様がナザレの会堂で読まれた箇所はこれでした。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。(4:18-19)」御霊に満たされたメシヤ、そして貧しい者、捕らわれている者たちに対する赦免と解放であります。

その前に、イエス様は御霊によって誘惑を受けられました。悪魔が何とかしてイエスの働きを妨げようとしたのですが、イエス様はその誘惑を退けられました。そこでガリラヤにおいて、また十字架の死に至るまで、イエス様は暗闇の勢力との戦いにおられました。その始まりは、会堂における悪霊との対決から始まりました。悪霊どもは、「お前は神の子だ」と叫ぶのですが、イエスはすぐに黙らせます。そうして、イエス様は病人や弱っている者を助けられます。そうです、メシヤが聖霊に満たされて行われる、弱い人を助け、病人を治され、捕らわれている人々を解放する働きをされていたのです。

イエス様の宣教をまとめると、二つになると思います。一つは「**権威**」です。イエスの教えを聞いた人々は、その権威に驚きました。そして悪霊さえも従うその言葉の権威に驚きました。イエス様が私たちに近づかれる時、そこには権威があります。私たちが圧倒される、驚くべき権威があります。そしてもう一つは、今お話ししました「**解放**」です。これまで自分たちの世界の中に閉じこもっていたところに、神の国が開かれます。人の支配から神の支配に移されます。

そして5章に入りますと、この働きの中に付いていく者たちが現れる話が始まります。弟子の第一人者はペテロです。ペテロをご自身の働きに召す話から始まります。それからマタイが召されます。そして6章に入りますと、十二弟子をイエス様が選ばれる話で終わります。

1A 人をとる漁師 1-11

1 群衆がイエスに押し迫るようにして神のことばを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸べに立っておられたが、2 岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。

ペテロやヤコブ、ヨハネは、イエス様を既知っており、この方をユダヤ教の教師、すなわちラビとして迎え入れていました。けれども職業は漁師であり、漁で生計を立てながらイエスから習っていたようです。当時は、このような形でユダヤ教のラビの弟子になり、動いていくということが行われていました。ペテロは、おそらく4章に出てきた、会堂での悪霊が追い出されたところも見たことでしょう。そして、そのまま自分の姑の熱をイエス様が癒されていたのも見ていたでしょう。しかし、それでも彼は、まだイエスが誰であるかを把握していませんでした。

私たちが、生きたイエスに会う時も同じでしょう。生きた証言を聞いても、また目撃しても、それでイエスが誰であるかを知るには至りません。自分の根源のところ、この方が神であることを体験せねばならないのです。それをイエスは体験させてあげます。

今、ペテロやヨハネ、ヤコブは、網を洗っています。夜通し漁をした後で、その後の作業をしていました。その時に、膨れ上がった群衆にイエスは教えておられました。場所はゲネサレ、ガリラヤ湖のことですが、アルベル山と山上の垂訓の山の間にある北東に広がる平野をゲネサレと言います。そのところで、イエス様が御言葉を語っておられました。

3 イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟にのり、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。

私たちは立って教えられたと想像してしまいがちですが、座っておられます。これが、ユダヤ教のラビが教えるスタイルです。

4 話が終わると、シモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」と言われた。5 するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」

昨夜、漁をしたけれど、何一つとれないことを認めました。自分の得意とするところで、何もできなかったということでもあります。自分の限界を知ったのです。けれども、この「でも」という接続詞がとて大切。限界を認めながらも、みことばに従いました。神は、新しいことを行われるときは、いつもこのようにされます。まず私たちに、自分たちの限界を悟らせます。自分の生き方に行き詰まるようにされます。自分でいろいろやってみて、何とかうまく行っているように見えるのですが、状況はよくなっていません。ああ、どんなことをやっても、結局はだめなんだと思ったときに、神は

初めてことばをかけられます。そして、私たちがみことばに従うように促されるのです。

6 そして、そのとおりにすると、たくさんの魚がはいり、網は破れそうになった。7 そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱい上げたところ、二そうとも沈みそうになった。

「普通、沖の深みでは当時の投網による漁獲法では魚は逃げてしまい、獲ることができなかったようです。ところが想定外のことが起こりました。おびたしい魚が網に入り、そのために網が破れそうになったために、仲間の者たちに合図をして助けてもらいました。しかし獲るには獲ったものの舟が沈みかけそうになったのです。」¹

こうして一匹もとれなかったのが、二そうの舟にいっぱいになりました。イエスの言葉の権威が、このような形で現われたのです。会堂で悪霊が追い出されるのを見ても、自分の姑の熱が引いたのを見ても、それでも彼自身の心の支えになっていた漁師という自負が、今、崩れ去るのを目撃して、それで彼は自分の支配ではなく、神の支配を体験したのです。

8 これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言った。9 それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなの者も、ひどく驚いたからである。

シモンはここで、ペテロと呼ばれています。ペテロは後に、変貌の山でイエスによって付けられた名前です。この時点から、自分で生きることからイエスによって生きようになるからです。それで、ペテロはひれ伏して、「主よ。」と呼びました。今までは自分の得意とするものをもって、自分を主体として生きていましたが、今度はすべてをイエスにゆだねるようになります。イエスの解放は、悪霊や病のみならず、罪からの解放に移っています。ペテロは、自尊心が崩れ落ちたことによって、神の聖さをイエスの中に見て、それで罪深さを知ったのです。

「ひどく驚いた」とありますね。これが、4章から何度も出てくる反応です。悪霊をイエスが追い出された時も、会堂で「人々はみな驚いて」と言っています(36節)。これは度肝を抜いた、という意味合いの言葉です。私たちが、生けるイエスに触れて、度肝を抜くようなことがあるでしょうか？私たちが、イエスの言葉を聞いて、そこに広がる神の支配、御国に触れる時に、度肝を抜きます。

10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」¹¹ 彼らは、舟

¹ 牧師の書齋 <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%83%AB%E3%82%AB%E3%81%AE%E7%A6%8F%E9%9F%B3%E3%81%AB%E5%AF%BE%E3%81%99%E3%82%8B%E6%80%9D%E6%83%9F%E7%9A%84%E7%89%B9%E5%BE%B4>

を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。

真実に、自分の罪深さを知った時にペテロはイエスに従いました。これが神の召しです。召命、あるいは自分が主に捧げる献身は、自分の至らなさを知っている者、至らなさと言っても、圧倒的な罪深さ、神の聖さを知ったからこそ、イエス様がこの言葉をかけてくださいます。ヨハネ 21 章で、ペテロは三度イエス様に、「わたしを愛しますか？」と尋ねられました。それはペテロが、三度、イエスを知らないと言ったことに呼応するものです。そこで、イエスは「わたしの羊を飼いなさい。」と言われました。

ここの「何もかも捨て」という言葉は、現在進行形ではありません。一度に行なった時制が使われています。ですから、こう戻らないという決心をして従いました。ペテロは、多くの弟子が去っていった後でも残っていた時、イエス様に、「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのこぼれを持っておられます。(ヨハネ 6:28)」と言われました。この決心をしたから、後になっても揺るがなかったのです。

2A 宗教を超える権威 12-26

1B きよめにおいて 12-16

12 さて、イエスがある町におられたとき、全身らい病の人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ。お心一つで、私はきよくしていただけます。」13 イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ。」と言われた。すると、すぐに、そのらい病が消えた。

ペテロ、ヨハネ、ヤコブらがいる中で、この奇跡が起こりました。彼らとは違いますが、このらい病人も、徹底的な無能な状態からキリストの完全へと導かれます。「全身」らい病となっていますが、これも「満たされる」と同じ言葉が使われています。先ほどのペテロの、「一匹もとれなかった」という状態と似ています。そして、これは律法の限界を示しています。レビ 13-14 章にて、らい病の規定があります。らい病はイスラエル共同体から疎外されます。汚れていると叫ばなければいけません。そして清められた時の規定もあるのですが、律法にはその力がなかったことです。「というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。(ヨハネ 1:17)」

そして、「主よ。お心一つで、私はきよくしていただけます。」と言っています。初めから、彼は主であることを認めています。彼はしっかりと神学を持っていました。主であれば全能者です。けれども問題は、それを意図しておられるかどうかです？だから、「あなたの意図であれば、意思であれば」と言っています。そして、イエス様は「わたしの心だ」と答えられています。その通りですね、イエス様はこのような人々のために来られました。さらに、イエスは手を伸ばされています。らい病に触れれば、その人は汚れます。しかしイエスは違いました。イエスが触れれば、らい病が清められるのです。

そして、「すぐに」きよめられました。徐々にではありません。これが神の国の到来です。御霊によれば、一瞬のうちに新しくされます。

14 イエスは、彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ祭司のところに行って、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物をしなさい。」15 しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが、話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まって来た。

この儀式はレビ記に記されています。イエスは、これが単に驚く癒しの話ではなく、ご自身が律法の成就、神の御言葉の權威であることを示すためでした。ですから、レビ記にある神の規定を行なった証ししてほしいと願ったのです。ところが、彼は言いふらしてしまいました。このようにイエスは、ご自身が誰かを知らせるために、悪霊を追い出され、その次にご自身が誰であるかを少しずつ示しておられます。私たちは、ここからキリスト者の働きをどうすればよいか分かります。行ないによって示し、それからなんでこんなことをしているのかを教えます。

16 しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。

これがルカの福音書の特徴です。イエスは祈られました。多くの働きを行って、その中で埋もれてしまうのではなく、独りになって祈られました。父なる神、ご自身を「これは、わたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」と言われた父に対して祈りました。

2B 罪の赦しにおいて 17-26

こうして、少しずつイエス様の御業は、ユダヤ人の律法の中に入り込んでいきました。今度は、律法学者らの考えていることに抵触し始めました。

17 ある日のこと、イエスが教えておられると、パリサイ人と律法の教師たちも、そこにすわっていた。彼らは、ガリラヤとユダヤとのすべての村々や、エルサレムから来ていた。イエスは、主の御力をもって、病気を直しておられた。18 するとそこに、男たちが、中風をわずらっている人を、床のままで運んで来た。そして、何とかして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとしていた。19 しかし、大ぜい人がいて、どうにも病人を運び込む方法が見つからないので、屋上の上って屋根の瓦をはがし、そこから彼の寝床を、ちょうど人々の真中のイエスの前に、つり降ろした。20 彼らの信仰を見て、イエスは「友よ。あなたの罪は赦されました。」と言われた。

パリサイ人と律法学者も、群衆たちと同じように、いろいろなところから来て、イエスの教えを聞いていました。そしてイエスは、人々によって囲まれていました。どこからも遮られていました。しかし、彼らは、屋根をはがしてイエスに近づきました。彼らにとって、人々はイエスに近づかない理由とならなかったのです。そして、イエスは、「彼らの信仰を見」られました。彼らの一連の行為は、信

仰の現われでした。

そしてイエスは、罪について言及されています。先ほどから、罪という言葉、罪に関連する言葉が出てきました。ペテロは罪深い人間と言いました。らい病人は、きよめられたいと願いました。このように、イエスは罪を処理する存在として紹介されていましたが、ここで、はっきりと、それが罪を赦す役目をご自分が持っていることを宣言されたのです。というのは、罪がすべての問題の根本だからです。

21 ところが、律法学者、パリサイ人たちは、理屈を言い始めた。「神をけがすことを言うこの人は、いったい何者だ。神のほかにも、だれが罪を赦すことができよう。」22 その理屈を見抜いておられたイエスは、彼らに言われた。「なぜ、心の中でそんな理屈を言っているのか。23 『あなたの罪は赦された。』と言うのと、『起きて歩け。』と言うのと、どちらがやさしいか。24 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに悟らせるために。」と言って、中風の人に、「あなたに命じる。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい。」と言われた。

律法学者たちが言っているのはそのとおりです。罪の赦しというのは、神でなければできないことだからです。人は罪を赦す、と言っても、究極的には神に赦されなければいけません。ですから、イエスが行われたのはまさしく、「わたしは神である」ことを意味しています。イエスは神から来られた方です。

そして、律法学者は、人を癒すことと罪を赦すことは後者が難しいことを知っていました。常識的には、目で見える足を直すことのほうが難しいです。ですから、足を直すことによって、罪を赦すという神のみができる権威を示すということです。

25 すると彼は、たちどころに人々の前で立ち上がり、寝ていた床をたたんで、神をあがめながら自分の家に帰った。26 人々はみな、ひどく驚き、神をあがめ、恐れに満たされて、「私たちは、きょう、驚くべきことを見た。」と言った。

何が驚いたかと言いますと、罪を赦すことが癒されることにつながったからです。癒しの力の中に、罪を赦す力が証明されたからです。これが驚愕でした。そして、いやされた中風の者も神をあがめたし、彼らも神をあがめました。これが、イエスが奇蹟を行われる目的です。ご自分の評判ではなくて、神があかしされることを目的とされていました。そして、ここでも、人々は驚いています。新しい働きを真に受け止めていたからです。

3A 取税人の招き 27-39

1B 罪人との食事 27-32

27 この後、イエスは出て行き、収税所にすわっているレビという取税人に目を留めて、「わたしに

ついて来なさい。」と言われた。28 するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。

レビとはマタイのことです。彼も、ペテロやヨハネたちと同じように、イエスの行われたわざを見聞きしていました。そして、そのイエスが彼に個人的に目を留めてくださいました。取税人は汚い職業と考えられていましたが、イエスはいっしょに付いて来るように言われました。

29 そこでレビは、自分の家でイエスのために大ぶるまいをしたが、取税人たちや、ほかに大ぜいの人たちが食卓に着いていた。30 すると、パリサイ人やその派の律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって、つぶやいて言った。「なぜ、あなたがたは、取税人や罪人どもといっしょに飲み食いするのですか。」

パリサイ人は、律法にしたがって、その規定を守らないユダヤ人を「罪人」としていました。彼らには、律法を守らせようとしませんでした。彼らと交わらないことによって、自分たちを聖く保とうとしていました。

31 そこで、イエスは答えて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。32 わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」

イエスは、罪人を招くために来られました。悔い改めた罪人と交わるために来られました。先ほどは、イエスは罪の赦しを宣言されましたが、それは、人間が神と交わるためであります。罪が人を神から引き離しますが、罪が赦されて、神といっしょになることができます。

2B 新しい皮袋 33-39

33 彼らはイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは、よく断食をしており、祈りもしています。また、パリサイ人の弟子たちも同じなのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています。」

彼らの本音は、「今まではこうだったのに。」というものでした。それがあったので、イエスの言うことなすことが、気に入らなかつたのです。この、「今まではこうだったのに。」という思いが私たちを支配すると、クリスチャンとしての成長が止まってしまいます。なぜなら、クリスチャンは、いつまでも悔い改める存在、変化し続ける存在だからです。今まではこうだったから、これからもこれでいいや、というのは、パリサイ人が持っていた考えと同じであります。

34 イエスは彼らに言われた。「花婿がいっしょにいるのに、花婿につき添う友だちに断食させることが、あなたがたにできますか。35 しかし、やがてその時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」

彼らは、弟子たちが断食をしないことで文句を言いましたが、断食とは悲しむとき、嘆くときに行

ないます。彼らは、いつもそれを行っていたということは、彼らが神とともにいる喜びを持っていなかったことに他なりません。それに対して、弟子たちは喜んでいました。神との交わりが回復すると、いつもそこには喜びがあります。神と交わることによって喜びがあふれます。

36 イエスはまた一つのたとえを彼らに話された。「だれも、新しい着物から布切れを引き裂いて、古い着物に継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、その新しい着物を裂くことになるし、また新しいのを引き裂いた継ぎ切れも、古い物には合わないのです。

新しい布切れは洗うと縮むので、古い着物に継ぎをすれば古い着物が破れてしまいます。

37 また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒は流れ出て、皮袋もだめになってしまいます。38 新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません。39 また、だれでも古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。『古い物は良い。』と言うのです。」

新しいぶどう酒からは、ガスが出てきます。新しい皮袋は伸縮性があるので大丈夫ですが、古い皮袋は固くなっているため、新しいぶどう酒を入れると破れてしまいます。この2つのたとえから分かることは、古いものを捨てなければ、新しい働きを受け入れることはできないことです。イエスは、貧しい者に福音を宣べ伝えられました。貧しい人とは、古い自分に死んだ人のことです。ペテロのように、らい病人のように、今までの自分の生き方や、自分のあり方に限界を認めている人です。だから、新しい働きが起こったときに、古い人を脱ぎ捨てて、キリストにある新しい人を身に着けることができるのです。古いものを持ったままで、新しい働きを受け入れることはできません。そして、次に、イエスが彼らの問題の核心を突かれています。

パリサイ人、律法学者は、古い物のほうが良いと考えていました。他の人々は、新しい物が良いと考えて、イエスの教えとわざを受け入れていきましたが、彼らは古い物が良いとしたのです。みなさんはどうでしょうか。イエスの新しい働きを、自分のものになりたいですか。それとも、今のままでいいと思いますか。罪の赦し、神との交わり、主にある喜びを実際に体験したいと思いますか。それとも、頭で信じているだけで、今のままでいいと思いますか。選択は、ひとりひとりにあります。

The new way rests on the Son of Man's authority and ministers to the needs of all with compassion.²

² Bock, D. L. (1994). *Luke Volume 1: 1:1–9:50*. Baker Exegetical Commentary on the New Testament (446). Grand Rapids, MI: Baker Academic.